

常に新たに

第十二回 韓国大会特集

(二〇一一年一月十七、十九日)

厳寒のソウル、内は熱気に満ちて

アジア・カルヴァン学会が韓国を会場にして開催されると、なぜか一年で最も寒い時期が選ばれる。前回は、二月であり、今回は一月だった。なぜこの厳寒期を選ぶのかを韓国の学会担当者に尋ねると、韓国では官公庁、教育機関は、三月から一年を始めるので、ちょうどこの時期が休暇にあたり、余裕があるからだという返事であった。それにしても寒い。ニンニクや唐辛子、朝鮮人参といった体温を上げる食材が重宝されるのは良く分かる。

総神(チヨンシン) 神学校を会場にした三日間の日程は無事に終了し、翌朝六時、極寒のソウルからリムジンバスで仁川(インチョン) 空港へ向かった。日本と同じ時刻を採用しているも、実際は一時遅く、まだ五時頃らしい。埃をかぶった窓から右手正面に銀円盤の月が見え隠れしつつ、私たちを空港まで見送ってくれた。

この学会を振り返ると、良くアレンジされたスケジュールで次々とプログラムを消化していったという印象である。目玉は国際カルヴァン学会会長のヘルマン・ゼルドホウイス(オランダ)の講演「二十一世紀のカルヴァン—過去の成功と現代への適用」であり、彼が主催する REFO500Asia を紹介することになった。

ニュース・

レター 第7号

アジア・
カルヴァン
学会

日本支部

2011/2/19

講演の要旨は
おおよそ次のよ
うであった。「カ
ルヴァンの働き
と神学が、いか
に近代社会形成
に大きな影響を
及ぼしたかは、
各地で行われた
盛んな生誕五百
年祭の行事を見
ても明らかであ
る。しかも特徴
的な点は、カル
ヴァン自身は生
涯ジュネーヴに
留まり、あまり
多くの旅をしな
かったが、この
地を拠点として
カルヴァンの教
えはヨーロッパ
さらに世界へと
広がりをもった
ところにある。
それは聖書の御

それは聖書の御

◆本学会は、
アジア地域
のカルヴァ
ンの研究者
が隔年で開
催する学会



言葉が中心となって広がりをもつような関係に近い。」
こう語って、聖書の御言葉の解釈と神学のもつ重要性、さらに教理の各項目がどのような広がりをもったか、また国家との関わりと、各地の改革者との深い連帯といった、幾つかの要点をかいつまんで、その伝達力、普遍性に光をあてた。そのことは同時に二十一世紀の神学の連帯と広がりについても新たな可能性を示唆する。

REFO500 というプロジェクトは、この講演内容を具体化する企画である。すなわち、カルヴァン生誕五百年祭の年であった二〇〇九年を契機に翌年二〇一〇年に立ち上げられたグローバルなプロジェクトである。ルターの「九五ヶ条の提題」が登場した年を祝う五百年祭が二〇一七年に開催されるまでの七年間に様々な活動を通して、宗教改革の広がりや再体験・再実現しようという企画である。「刷新、変化、適用」というフレーズのもとに、オランダを中心にプロテスタント、カトリックも含め、大学や博物館などと提携して、世界的な広がりを目指す。すでにアメリカの複数の大学、ドイツの教育機関、ジュネーヴ他のヨーロッパの幾つかの地域、南アフリカへと広がり、今回 REFO500Asia という主題のもとにアジア各国の参加を求めている。

活動の内容は、教育や研究の交流・充実、教会と教理の共有、芸術や文化の展示・交流、聖書や言語の理解、資金の充実など多岐に亘り、参加者の自主的な取り組みが期待されている。REFO500 とは、いわば多様な人々が行きかう「プラットフォーム」、あるいは多くを傘下に入れる「大きな傘」のようなシンボルでもある。これについて詳細を知りたい方は、ホームページを開いて欲しい。

<http://www.refo500.nl/en/news/6>

ところで私個人としては、この企画が現代のキリスト教を活性化するための、カンフル剤的な役割を担うだろう感じつつも、基本的なスタンスの問題として、一つ気になることがある。すなわち、宗教改革は、もともと横のネットワークを意識して活動を開始したものではなく、聖書を深く読み、解釈して新しい光を獲得した時であった。そもそも中世末期は（カトリック）教会の強大な力が各地に及んでいたものであり、すでにグローバルな世界が広がっていた。そのような状況下で改革者たちがそれぞれの生活の場で聖書を「深く読む」、つまり「下へ掘り下げる」取り組みに励んだ時であった。それが結果として各地へ伝播したのである。宗教改革の広がりを現代に再現しようと思図するならば、まず初めに、未だに解明されていない改革者たちの聖書とその解釈、説教について研究することから開始すべきではないかと考えている。

さて今学会で発表された研究は十四であり、日本からの発表は三点であった。久米あつみ氏の発表は「oblivio voluntaria—日本におけるカルヴァン受容のいくつつかの型—」と題し、菊地純子氏は「ダビデ—カルヴァンが自身を投影した人—ただ神の選びによって」であり、そして私の「日本におけるカルヴァンの説教」であった。

また会場で学会誌「Calvin in Asian Churches, vol. 3」が配布された（裏面参照）。

今回の学会の参加者のうち、日本からは十一名で、比較的若い人々が参加してくれたことは幸いなことであった。次回は、台湾で二〇一三年の予定である。新会長には、長く重責を負った韓国のスーヤン・リー牧師が辞し、台湾のヤンエン・チェン教授へバトンが手渡された。

充実しつつも、またたく間に過ぎた三日間を思い出しつつ、海岸も凍りついた仁川空港から成田に到着したら、

冬の日差しも暖かく感じられ、なんとなくほっとした。少し遅く我が家への帰途に就いたが、新幹線の窓から今度は黄金色のお盆のような月が正面右手に見える。思わず顔がほころんだ。私たちの忙しい日々の中で、ずっと変わらず見守り続けて下さる存在がある。可視的自然物は、それを精一杯証している小さな一個なのである（詩編第八篇、ローマー・二〇）。次回に向けて新たな力が湧いてきた。

野村 信

「韓国での交わり」

久米あつみ

韓国の学会は誠に充実したものであった。朝の八時前にホテルを出て会場の総神神学大学まで一時間近くバスに揺られ、夜の一〇時ごろ帰りつくまで、時間割がびっちりと組まれていてサボる隙がない。おかげで、珍しく帰国後も疲れが残ったが、その疲労感には心地よくさえた。

個々の発表では韓国の中でもカルヴァンのレトリックに注目している人がいること、ルターとカルヴァンの比較研究をしている人がいることなど、嬉しい発見であった。

二日目の会場はバスでさらに一時間以上かかるブンダンのキャンパスであった（中村恵太さんが「ああ、この敷地のチョッピリでも東神大にわけてくれたらな」とため息をついていたのが忘れられない）。その帰りのバスでのこと。最前列に座っていたシン氏（本大会事務長）は、名簿をみては次々指名して、「何か一言」と発言を促した。

私の番になったら「韓国との関係を話してください」

とのこと。はて、話すほどの関係は何もないが、と思った瞬間、母小塩 れいのことがざざっと音を立てて私の頭になだれ込んできた。こんな話、していいかな、ま、バスの長旅で何を話してもよからうと、覚悟を決めて話し出したのは一九一九年、九二年も前のことである。

東京女子大に入学した母が（ユウ）さんという韓国留学生と親友になり、韓国語が一言もわからないまま彼女とその友人達の独立運動（おそらく）のカモフラージュ役を務めたこと、学生ながら早稲田の同じく韓国人留学生と結婚していた彼女が出産のあと妊娠中毒、尿毒症を起こして亡くなったその最期を看取ったこと、それ以来韓国の友を迎え入れ客人としてもてなすことを生涯夫とともに続けたこと、その両親のおかげで韓国の方々と文化に対する尊敬の念を私と兄とはもち続けられたことを語った。

三日目午後の遠足の終わりににも、嬉しい交わりの時があった。伝統的な茶店での、歓談のときである。私の席の前に座つたのはミヤンマーとケニアからの留学生で、ティータイムの終わりごろにはすっかり打ち解け、二人のママになったつもりで写真を撮ってもらった。あの二人、とくにミヤンマーからの留学生のこれからを祈り続けて行きたい、と強く願った。斉藤みまこさんが牧師らしい心遣いをされていたのにも感じ入った。

立教大学に留学中で一時帰国をされていた金さんや、日本からの留学生で私たちの世話を細やかにしてくれた宮崎君のことなども忘れがたい。この会に出席してカルヴァン研究をしたくなったという若い世代の人たちもいて、大いに励まされた。日本においてもカルヴァンの学びを若い世代に呼びかけつつけようと、思いつつ帰国した次第である。

「アジア・カルヴァン学会に出席して」

菊地 純子

アジア・カルヴァン学会にはじめて参加させていただきました。私の出席母体はカルヴァン・改革派研究所（日本キリスト教会神学校付属）です。出席母体というのはカルヴァンに係わる学びを神学校の学期中に月に一回行っている関係で出席に到ったということです。

日本の他の出席母体から来られた方々と親しいお交わりをいただき感謝でした。特に私の発表に来てくださり、質問までして下さったり、空き時間に議論をして下さった方々に感謝します。昨年まで世界改革教会連盟の常任委員を務めていた間に、韓国や台湾の神学者の方々とも知己を得ましたが、その方々にも再会し東アジアのカルヴァン研究者の輪を感じた次第です。韓国では韓国カルヴァン学会を一つにまとめられて、そこがアジアカルヴァン学会を支えておられるようです。

昨年夏の国際カルヴァン学会で、前・李師から議長団員のバトンを受け取られた現・李師は、次回の国際カルヴァン学会をみすえて日本の研究者への連絡方法



を尋ねられました。日本で各母体を結ぶ連絡網があれば、より協力しあって、学びを深めることができるかも知れません。アジア独自のテーマがあるでしょうか。キリスト教会の規模も日本は比較にならないくらい小さく前提にしている状況をなかなか共有できません。けれども十九世紀後半に欧米から宣教された歴史は共有しておりますので何か協力して学ぶテーマがあるように思います。次回を楽しみにしています。



「第十一回アジア・カルヴァン学会に参加して」

豊川 修司

（日本キリスト改革派 高島平キリスト教会牧師）

日本カルヴァン学会員ではありませんでしたが、会議に出席させていただき、大変貴重な経験をしました。主なる神様に感謝します。

カルヴァン研究第一人者の渡辺信夫先生（日本キリスト教会・牧師）を始め、フランス文学・哲学者の久米あつみ先生（元帝京大学教授）、野村信先生（東北学院大教授・牧師）方々とお交わりを頂き、大きな刺激を受けました。

論文発表件数は十四件、内多くが博士号をもっている方々で、英語の論文を読んで、残り十分間で討議をしました。興味のあつた発表は「カルヴィンの予定論」でした。質問の中に「予め選ばれているなら、伝道は不要ではないか」という意見がありました。韓国の学者が、「この教理は恵みの教理で、神様が信仰を与え、救いと命を与えるものだ。これを一人でも多くの人に知らせることが大事だ」と議場の論議に助け舟を出しました。討議内容が身近なもので、良き学びの時となりました。それにしても語学力の高さには驚きました。

最も印象に残った言葉は、「カルヴァン研究を継続できた理由は、説教を豊かにするためです」と、八十歳を超えてもなお、研究を続けておられる渡辺信夫先生の言葉でした。

これからも、カルヴァンの著書「キリスト教綱要」（渡辺信夫先生訳）や学会の論文などを通して、神学と説教と教会形成を豊かにしていきたいと思えます。なお、この機会に、カルヴァン学会日本支部の何らかの会員にな

つて、お役にたきたいと願っています。また、次回までに韓国語と英語の更なる向上に励みたいと思います。団長であられた野村信先生、本当にお世話になりました。ありがとうございます。

「カルヴァン学会に参加して」

青木 義紀

今回初めてアジア・カルヴァン学会に参加しました。実は大学生の時に、八王子で行なわれた学会の案内をもらっていたのですが、自らの研究の未熟さに躊躇し、その時は参加を見送ってしまいました。あれから十余年、やっと念願叶っての参加となりました。今回の学会で感じたことを大きく二つ述べさせて頂きたいと思います。

第一に、発表された研究内容に関して、アジア・カルヴァン学会は、一方でその多くを欧米における最新のカルヴァン研究に学び、他方でアジア各国の文脈にカルヴァンを適応し、その受容の歴史が研究されていました。この後者に、「アジア・カルヴァン学会」の一大特徴を感じました。

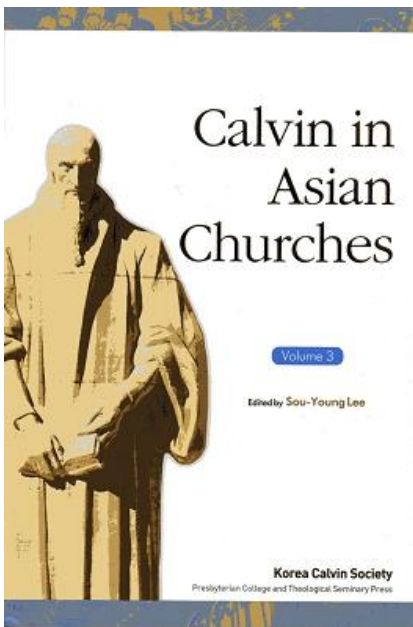
第二は、その交わりの深さです。韓国に到着して最初に会場に入った時、多くの方々の挨拶が自己紹介ではなく、「久しぶり」とか、「元気でしたか」という挨拶で始まっていたのに驚きました。この学会が、いかに多くのリピーターで構成され、お互いに気心知れた仲であるかがすぐにわかりました。初参加の私は勿論このような挨拶をされることはありませんでしたので、少々羨ましく思いました。私も次回、次々回には、お互いにこのような挨拶を交わせるようになりたいと感じて帰って参りました。

した。

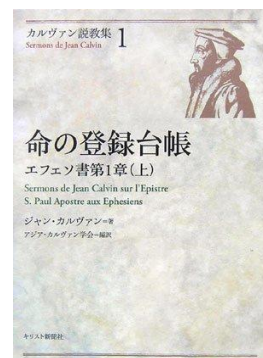
〈学会誌 第三号発行される〉

一九九七年に開催された第六回アジア・カルヴァン学会・台湾大会で提出された学会誌発行の希望は、韓国のカルヴァン学会で具体的に進められ、二〇〇二年に第一号が出版された。爾来、第二号が二〇〇四年に、そして第三号が二〇〇八年付けで刊行された。この号は、昨年の国際学会で配布され、今回、アジアからの参加者全員に配られた。

アジア諸国の学者たちによるカルヴァンに関する様々な分野の研究をこのような学会誌を通して目にすることが出来るのは幸いなことである。しかし、英文であるためか、ほとんど日本国内では、内容についての議論や意見は聞かれない。これからさらに若い人々がアジア地域に根差して各国と交流・親睦を図りながら、カルヴァンや宗教改革の神学、プロテスタントの研究などを積極的に進めてほしいと思う。なお残部が少しあるので、入手を希望される方は連絡していただきたい。



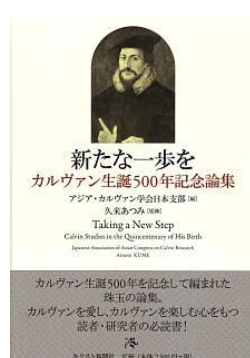
〈本学会日本支部の出版書籍〉



◆エフェソ書第1章 第1巻



◆カルヴァンの珠玉の説教集 第2巻



◆カルヴァン生誕500年 記念論文集

アジア・カルヴァン学会日本支部 〒981-3622
宮城県黒川郡大和町もみじヶ丘三の三三の1
野村 信
e-mail: Sho2999@aol.com
URL: <http://reformed.cocolog-nifty.com/calvin/>